

シヌグ・ウンジャミ論：琉球北部圏の文化

小野, 重朗 / オノ, シゲオ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

1993-12-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015740>

シヌグ・ウンジャミ論

— 琉球北部圏の文化 —

小野重朗

沖縄北部から奄美諸島にかけて、すなわち琉球北部圏に分布するシヌグ・ウンジャミを考えるに当って、この圏内に限って夏折目・冬折目という祭りがあり、これとシヌグ・ウンジャミを総合して考えることによってシヌグ・ウンジャミの本質と由来とを論じてみたい。

一、夏祭りとしての大折目・海神折目・シヌグ折目

『琉球国由来記』の巻十五、十六を中心にして七月の頃にシノゴ折目、海神折目の記事が多く記されておられ、それらに混って大折目という祭りがあることが記されており、現在も国頭の今帰仁村、東村などにはウプユミ、ウプウユミなどいわれる大折目がある。また一方奄美大島にも幾つもの集落

で大折目（ウフンメ）とか夏折目（ナツウンメ）とよばれるノロの祭りが現在も行なわれている。それらをまとめて夏祭りとして、その分布を次に図示してみよう。図では沖縄本島とその北部の離島は約二倍に拡大して示してある。

まず、奄美大島のウフンメ（大折目）から説明しよう。

①奄美大島名瀬市大熊だいぐまのウフンメ・フウウンメ 大熊は北部奄美大島でノロなど女神人による神祭りの最もよく伝承されている集落で、神祭りには旧暦六月初庚の日にアラホバナ（新穂花）という稲の初穂祭りがあり、次に旧暦七月中の壬の日にウフンメまたはフウウンメ（共に大折目）という祭りがある。ノロなど十数人の女神人とグジヌシという男の神人とがトネヤで神事を行なう。女神人はカブリカズラという羊歯の葉の冠をつけ白衣。ノロはミキという神酒を桃の木の枝でかき回す儀式をし、皆でオモリを歌う。年中最大の祭りといいい農作、漁業の栄えを願うという。フウウンメはナツウンメ（夏折目）ともいい、それに対して旧暦一月初つちのえ戊つちのえの日にフウウンメ（冬折目）を行なう。祭りの行事はウフンメとほとんど変りはない。一年最後の祭りで、この頃に収穫するイモ類の祝いだから土と関係する戌の日に行なうという。

②加計呂麻島、瀬戸内町須子茂のウフンメ・フウウンメ ウフンメは旧六月の中の庚の日に行なう。ここでも稲の初穂祭りであるアラホバナの一〇日ほど後になる。アシャゲ（屋根、柱、床だけで戸のない祭場）で、ノロなど神女が白衣、草の冠をつけて祭る。ノロは神酒ミキの椀をアラホバナには一

本の稲穂でかき回すが、ウフンメには粟の穂でかき回す（今は粟を作らず粟穂がなくて中止）。ウフンメのウーは粟のことで粟折目の意だという人もいる。一方フユウンメ（冬折目）は一二月の戌の日に行かない。アシャゲでなくトネヤ（住居用の家の祭場）で神女たちは白衣も草冠もつけずに行なう。家々から栽培山芋（コーシャ）や甘藷（ハンス）を集め、それを煮て食べて祭る。

——このようにウフンメは奄美大島から加計呂麻島へと全域に分布し、六月中旬から七月の祭りとなつてゐる。ウフンメのウーは大とも粟とも考えられているし、これを冬折目に対して夏折目とよぶこともある。だから年中の大きな祭り、粟の収穫の祭り、夏の祭りという性格をもつてゐる。祭りのミキという神酒を粟穂でかき回す例や、桃の枝や桑の枝でかき回す例があるのは粟の収穫の意味であり、桃や桑の枝は夏の祓いの意味があるものと思われる。ウフンメに来訪神の観念はみられない。冬折目については後に考えることにする。

同じ大折目の意だが、ウプユミ、ウプウユミと言われる大折目は沖縄本島の北部本部半島の今帰仁村や東村などにみられる。この地方の大折目は旧暦七月の盆後の亥の日である。

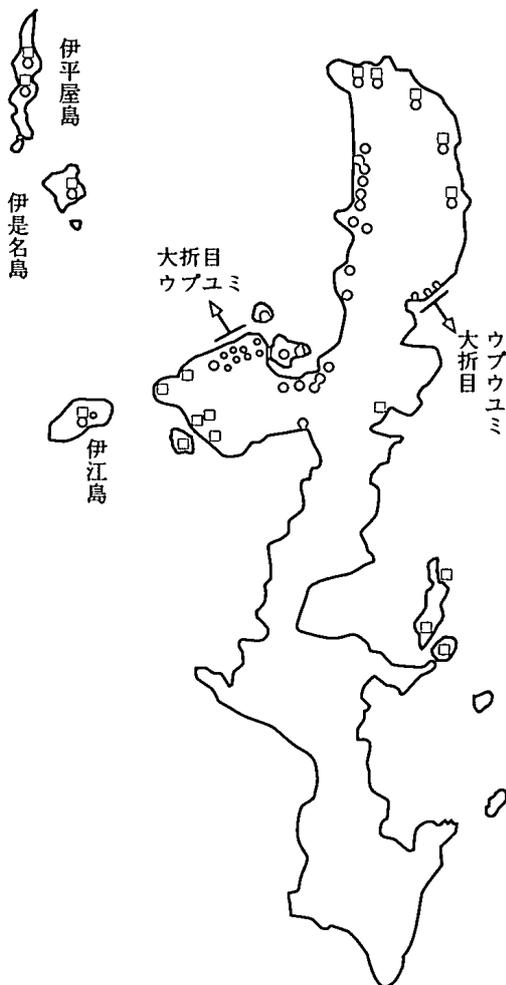
③今帰仁村上運天のウプユミ（大折目） 勢理客・湧川・上運天・運天の四カ字の神人は合流して勢理客の御嶽およびノ口火の神を拝み、ついで湧川・上運天の御嶽で祈願し、その後湧川と上運天ではそれぞれのアサギ庭でワラビミチがおこなわれる。上運天ではアサギでノ口が正座して祈願した後ミチ（米で醸した神酒）を盛った椀を捧げると、男の神人が背後に廻ってノ口の両耳のところを

シヌグ・ウンジャミ
大折目・夏折目
(旧暦七月)

- シヌグ折目
- 海神折目
- 大折目・夏折目



夏折目・粟折目
大折目(ウフンメ)



徳之島



沖永良部島



与論島



ウンジャミ
芋折目・冬折目
(旧暦十一月)

- * 冬折目・芋折目
- 海神折目 (十一月)
- △ 400m級の山



おさえる。その時に区長が太鼓を叩き、参加しているシマの老幼男女全員で

クトウシヌ ウンサクヤ

ナカムラチ ハタムラチ

(今年のウンサク(神酒)は椀一杯盛って、溢れるばかりに盛って)

と唱和する。唱和に合わせてノロの頭は左右にゆさぶられ、唱和がすむと全員で「ワツシヨイ、ワツシヨイ」と掛声をかける。ノロの椀からは当然にミチがこぼれる。ついで男の神人、区長、長老たちがミチを直会する。それに先立って同じような唱和が繰返されるし、頭もゆさぶられる。実際にミチがこぼれて、溢れるほどミチを醸すことのできるユガフ(世界報)を象徴的に演出するのである。

(平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』一八五注(1)ページ)

④今帰仁間切郡村の大折目 毎年七月、大折目トテ、海神祭、旦作毛之為ニ、巫・大根神・居神、都合貳拾人餘、城内、ヨウオスイト云所ニ、タモトヲ居へ、花・五水(両惣地頭ヨリ出ル)祭祀シテ、アワシ川ノ水トリ、巫・大根神、浴テ、七度アザナ廻リイタシ、庭ニテ酒祭ル也。ソレヨリ縄ヲ引張、船漕真似ヲ仕リ、城門外ヨリ、惣様馬ニ乗、弓箭ヲ持、ナカレ庭ト云所ニ参リ、潮撫デ、親川ニイタリテ水撫デ、又城内、ヨウオスイニテ、祭祀也。(『琉球国由来記』卷十五)

⑤本部町具志堅のシヌグ・ウフユミ 旧暦七月一九日から一日おきの行事が続く。

一九日(ウーキフジ) 船漕ぎのこと。ノロ(女神役)、シマンペーフ(男神役)、根神(女神役)は

聖地を回り、今帰仁城跡にある本部舟という石舟の所に行き、漕ぐ所作をして船の航海の安全を祈る。
二一日（ウフユミ）ノロ、シマンペーフの列を弓を持った根神四人が守ってアシャギで祭り、マチ
ブで国頭に向って悪風を追い払うことを祈願し、浜と川で身を浄める。

二三日（シルガミ）白衣のシマンペーフはシルガミ（男神役）を指示して、三組に分け、太鼓を打ちつつ集落を回り、新築の家など七回廻って祓い、合流して海と川で身を浄める。

二五日（ウスデーク）女たちが白太鼓踊りをしてアシャギを回る。（昭和五二年調査）

——③では沖縄本部半島のウプユミ（大折目）の例を挙げ、④では『琉球国由来記』から、そのウ
プユミを海神祭とも呼ぶ例を挙げた。④の今帰仁間切郡村というのは疑問があるが、平敷令治氏は今
帰仁城下の今泊だろうと考察している。^{注2)}今泊では今でも大折目を海神とも称しているという。⑤は
そのすぐ隣りの本部町具志堅の例で、ここでは海神といわずシヌグと呼んでいるが、その中の一部の
行事をウフユミと呼んでいる。この集落の人はウフユミとは大弓の意で根神が弓を持つことによると
考えているが、これは今帰仁村の例から考えて大折目の意であることは間違いない。

そうしてみると今帰仁村などに広くみられたウプユミ、ウフユミ（大折目）はウンジャミ（海神
祭）と同名と考えられ、またシヌグとも同じと考えることができよう。それらの機能をこの例で拾い
出せば、③のウプユミ（大折目）ではノロの持つ椀のミキを揺りこぼして豊年、世果報を象徴する儀
式が行なわれ、④の海神祭では集落を祓って回り、縄を張った舟型を漕ぐ様をして航海の安全を祈る

ものと思われ、⑤のシヌグでは石舟を漕ぐ様をして航海安全を祈り、また集落と家々を祓って回る。こうした機能の上からも大折目と海神とシヌグは幅広い目的をもった祭りとして同性格のものと考えてよからう。

さらに先にみた奄美大島の大折目（ウフンメ）と本部半島をめぐる大折目（ウプユミ、ウフユミ）とは共に琉球北部圏の夏、旧暦七月を中心にしたノロ組織による大きな折目として、二つを無関係な祭りと考えることはできないだろう。共に祓の性格が強く、農耕的性格をもつばかりでなく、②では神酒のミキを粟穂でかき回して祝うのに対して、③ではミキを揺りこぼして農作を祝うのも、共通な農耕的儀礼の発想が流れていると思われる。

琉球北部圏に、地図に示したような分布をして、夏七月に大折目、海神折目、シヌグ折目などよばれる重要な祭りが分布してきたと言えるのである。

二、冬祭りとしての冬折目・芋折目・海神折目

奄美大島の大折目の事例①②の中で、大折目に対応して冬折目（フウウンメ）という旧暦十一月の祭りがあるのを見てきた。もう一つの分布図をみてもらえば解るように、この奄美大島の冬折目に極めて類似した祭りが、沖縄本島北部に濃く分布して芋折目系の名称でよばれている。さらに重要なことには『琉球国由来記』の中にはこの十一月に海神折目が行なわれたことが記されている。ここでは

これらの冬十一月に行なわれる祭りを総合的に考えてみたい。

まず、奄美大島の冬折目（フユウンメ）の事例を、先の①②に加えてもう二つほど記してみよう。

⑥奄美大島大和村津名久のフユルメ 旧暦十一月の戌、己の日にノロたち神役が集まってフユルメ（冬折目）を行なう。家々から集めたコーシャという畑に作る山芋を煮、ミシヤク（ミキ、神酒）も作って祭る。この日は山の恐ろしい山の神、岳の神が活動する日だと言い、山の神が鉦を鳴らして里まで下ってくるという。人々はこの日は恐れて山に行かない。

⑦奄美大島宇検村阿室のモーバライ 旧暦十一月の祭りをふつう冬折目と言わず、トメアスビ（一年の終りの祭り）、モーバライ（農地の祓い）、キトウ（祈祷）などといい、農作に悪いことが起らぬよう祈る祭りという。元はこの日には集落で養っておいた一頭の牛を殺して集落全員で食べる行事があったという。

——先に挙げた①②は冬折目の一般的な例で、⑥⑦はその特殊な例を挙げてみた。一般には家々からコーシャ（畑作山芋）、ウム（里芋）、ハンス（甘藷）などを出して、その煮たものをノロなど神人の祭りに供えてイモ類の豊作を祝うのだが、⑥では冬折目の日は恐ろしい山の神の活動をする日で謹慎する日とされ、⑦ではその災厄を払い逃れるために、養っておいた牛一頭を集落で殺して食べて人々が身を固めて災厄をのがれようとした。このような例から考えて、冬折目はイモ類の収穫祭とだけでは尽せない重要な機能と意味がある、またはあったことがわかる。

次には沖縄本島北部の芋折目についてみてみよう。これも旧暦十一月の行事で、その名称は『琉球国由来記』で見ると幾つかの変異がある。分布図に示したように、国頭間切では芋折目、久志、今帰仁、名護間切では芋ナイ折目（ナイはノの意）、羽地間切ではランナイ折目（ランは芋）、本部、金武間切では芋祭、恩納間切では野原祭と変化しており、二八〇年をへた現在もほぼその名称は伝承されているようである。次にはその芋折目の事例を挙げておくことにする。

⑧久志村汀間のウンネー　ウンネーはウンネー折目（芋の折目）のことで旧暦十一月に日を選んで行なう。頭割に一人一個ずつ各戸から生の芋（甘藷）を、区長が徴収して、お宮でノロ、根神が芋の豊作祈願の祭りをする。その芋は、ノロと根神がわけてもらう。その夜には各家々でも芋をにて食べて祝う。〔沖縄民俗〕第十三号³⁾

⑨本部町具志堅のウンネー　旧暦十一月の十五日までの亥の日に行なう。島クサラ（旧暦九月亥の日の行事）と同様にパシグチで牛を殺し、一部をウンネーの前日のチチヌウガン（月々の御願）に供える。この日、ノロ、シマンペーフ、根神、居神（シマンペーフだけが男神）はトヌ（祭屋）に、殺した牛の煮汁に少々肉を入れて、吸物椀の四つに入れて供える。各神人はお重を持ってきて、二、三、四、五、六月のウマチー（お祭）の豊年を祈願する。ウンネーには前日殺した牛から二〇斤をとって吸物にして椀一〇個と、生芋5斤とを共にトヌに供えて感謝の祭りをする。吸物椀一〇個はウユミガミ（折目神女五名、男五名）で食べる。残りの肉を三つのアシャギに分けて供えて、ウユミガミが処

理する。

〔沖縄民俗〕第十五号⁽⁴⁾

⑩国頭郡のウンネー 明治二十四、五年頃迄「ウンネー」と称し毎年旧十一月、一字（元の村）にて牛一頭を屠り之を犠牲として神に捧げ而して字内諸々の災難払除を祈祷する祭祀ありしが近年之を廃するに至れり。（『沖縄県国頭郡志』⁽⁵⁾）

—— ⑧⑨⑩にみられるウンネーは『琉球国由来記』の芋折目、芋ナイ折目のことで芋の折目の意である。⑧ではその名の通りに家々から芋（ほとんど甘藷）を供出してノロたち神女が中心になって、芋の農作を感謝して祭る。芋折目のほとんどの例はこのような内容のものである。ところがそうした一般的な芋折目の中に混って、⑨⑩のような例がみられる。⑨は先にシヌグとウフユミの事例⑤にあげた本部町具志堅の例で、ここはよく古形を残している集落と言えよう。このウンネーが調査されたのは一九六八年（昭和四三年）のことだが、その頃この通行行なわれていたか否か明らかではない。ウンネーのために牛一頭が供犠されるのだが、その肉を使って別の月々の御願も行なうという。しかし供犠の目的がウンネーにあることは明らかである。このような例は古くは多くみられたことが⑩にはつきりと記されている。

ここで思い合されるのは奄美大島の冬折目の事例⑦にも牛の供犠が行なわれたことである。このことは沖縄本島北部地域の芋折目と奄美大島の冬折目とが共に芋の収穫儀礼だというだけでなく、より

基本的に同一の祭りであることを証拠立てている。さらには芋折目と冬折目とが共に芋の収穫儀礼とだけでは言い尽せない深遠な意味をもつ祭りであることを教えている。

⑥では冬折目の日は山の神が活動する日なので恐れて山に行かないといい、⑦でこの日に農地などに災害が起るといふのはこの山の神の活動によるもので、⑦⑨⑩にみられる牛の供犠はその山の神の災厄を祓うための防護手段であったことがわかる。冬折目、芋折目が芋の類の収穫祭でもあるのは芋類特に山芋、里芋などは山の神の支配下にある山の畑、山の焼畑の恵みによるもので、山の神への畏怖と感謝とが表裏となってこの日の祭りを性格付けてきたことが知れるのである。

さて、もう一つ旧暦十一月の祭りの事を記しておく。ウンジャミ（海神折目）というのはシヌグ（シヌグ折目）と共に旧暦七月に行なわれる祭りとしてされているけれども、そのうち海神折目だけは十一月に行なわれた例が確かにあるのである。『琉球国由来記』に記録されたその二例を次ぎに引用しておこう。

⑪伊平屋島の海神折目（十一月、島中ニテ日選仕り申。遊一日ノ事）右、海ノ神御祭用ニ、神酒肴餅、相調、伊是名城御イベ前ニ、ノロ・掟神申請、御祭仕り、ヲエカ人・サバクリ、御拝四ツ仕也。

（『琉球国由来記』巻十六）

⑫本部間切瀬底村の海神折目（メンナノ御嶽、瀬底巫火神ニテ）毎年十一月、海神折目之時、仙香（巫）花米五合、神酒三、五水三合（百姓）魚三絡（自ニ百姓一巫・根人へ遺）供レ之。同巫・根

人祭祀也。(『琉球国由来記』卷十五)

——⑪の伊平屋島の海神折目の記事は簡単で内容がわからないが、伊是名城の御イベで祭るとあるから伊是名島での記事と思われる。『琉球国由来記』にはこの記事の前にシノゴオリメ(シヌグ折目)の旧暦七月の詳しい記事がのっている。だから由来記の時代(一七一三年刊)には伊平屋ではシヌグは七月に、海神は十一月に行なわれていたことは明らかである。現在は伊平屋島でも伊是名島でも、旧七月十六、十七日に海神があり、その一、二日ほど後に引き続いてシヌグが行なわれている。つまりこの二百数十年の間に海神折目が旧十一月から旧七月のシヌグの前に移って行ったということである。このことは後で記すように海神折目とシヌグ折目とが同性格の祭りであることを示すと共に、海神折目は冬の十一月にも夏の七月にもあり得る祭りであることを教えている。

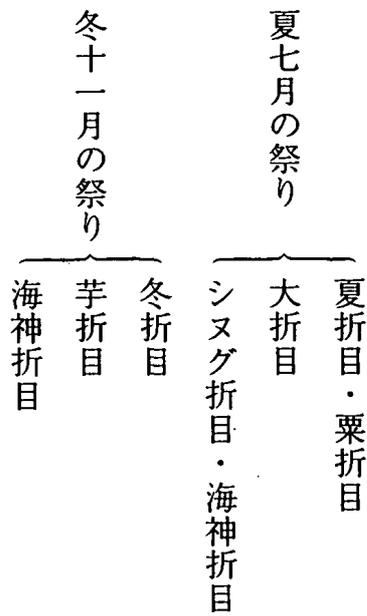
⑫の瀬底島の海神折目も旧暦十一月であり、⑪⑫は共に離島の例で、このような十一月の冬の海神折目が決して新しい習俗ではなかったことを示していよう。この瀬底島でも現在は海神折目を行なわず、その代りのようにして旧暦七月にシヌグ折目を行なっている。

またこの瀬底島の由来記の記事には集落の神アシアゲで同じく十一月に芋祭を行なって蕃藷(甘藷のこと)を供える記事がある。このことは十一月の海神折目は芋折目と同じ祭りとは言えないが、一年の終りの祭りとして極めて似た意味をもっていたと思われる。祭場と供えものをみると海神折目はメンナノ御嶽に魚三絡を供えて祭り、芋祭は神アシアゲに蕃藷三器を供えて祭っている。これは二つ

は共に一年の終りの十一月祭りだが、芋折目の方は山の神を主な対象としており、海神折目はその名のように海の神を主な対象としていることを示しているのであろう。

このように見てくれば、奄美大島の冬折目と、北部沖縄本島の芋折目と、さらに数は少いが十一月の海神折目とは旧暦十一月の冬の祭りとして同じ意義と機能をもっていたと言える。特に冬折目と芋折目は共に芋の収穫祭というだけでなく、山の神を恐れ牛の供犠が行なわれたという点までも同一性が明らかである。

さてここで、先の節でみた夏の祭りの一群と、この節でみた冬の祭りの一群とをもう一度書き出し、較べながら総括しておこう。



これらの祭りの分布を記した二つの分布地図をみてもらうと、夏の祭りのものと冬の祭りのものが極めて似た分布をしていることがわかる。その分布範囲が沖縄本島北部とそのまわりの島々から、

奄美大島までに限定されている点である。これらの祭りは宮古、八重山の島々には勿論、沖縄本島の中南部やその離島にもみられないという不思議な分布の共通性をもっている。この点だけからみても、この二群の祭りが同質性をもつことが明らかである。

ではこの鮮明な分布地域はどのような地域的な特徴をもっているのであろうか。最も大きいのはこの地域が山地であることであろう。冬折目の方の分布図には標高六〇〇メートル級以上の山が記入してある。恩納岳を南限にして北は奄美大島の湯湾岳までほぼ引き続いて高い山が分布し、地質としては古生層、中生層の水成岩質の保水性のある山地からなっている。それに対して、この地域から南の沖縄本島中南部から宮古列島にかけての広い地域は隆起珊瑚礁を中心にした新生代の乾燥し易い平地となっている。ここに風土的な生態的な大きな相違があり、ここに見てきた独特な祭りはこの山地の上に成立した祭りと考えることができるだろう。

さらにもう一つ、これらの祭りは季節によって夏と冬とに両分されていることも特徴となっている。南島には夏と冬はあるが、春と秋はないと言われる。ウリズンとかミーニシ（新北風）とか春らしい秋らしい気候を現わす語はあるが、春、秋という言葉はなく、春折目、秋折目も勿論ない。

ここにみてきた二群の祭りは夏折目、冬折目の名称に示されているように夏と冬とを代表する祭りであるが、この地域から南下して沖縄本島の中南部にはこれに相当する祭りをみることはない。このことは注目すべきことに思われる。

長い日本列島を南下して見ていくとすれば、九州本土から南西諸島を下ってトカラ列島までは春、夏、秋、冬の祭りがそれぞれにあり、奄美大島から沖縄本島北部まではここに見たように夏と冬との盛んな祭りがあり、さらに沖縄本島を南下していくと月々の多くの祭りはあるが、四季の、あるいは二季の祭りはみられなくなってくる。長い日本列島には祭りの季節感に三つの大きな区画があり、その中央にある一つがこの北部琉球圏であるということになる。

そうして、この夏、冬の祭りの中で、夏折目などの夏の祭りは粟の収穫の祭りの性格をもっており、冬の祭りの冬折目などは芋の収穫祭の性格が殊に強いことが注目されるのである。(稲と麦との祭りは全琉球圏を通じて多種多様にあることと対応していると言うことができる。)

三、シヌグ・ウンジャミの性格

こうした夏と冬との二群の祭りの中でシヌグ(シヌグ折目)とウンジャミ(海神折目)とは特にその機能や性格が理解し難く、また二つがどう関連しているかも明らかでない。次にはこの点に焦点をあてて考えてみたい。まず代表的なシヌグとウンジャミの例を挙げておこう。

⑬奄美、与論島のシヌグ シヌグ年と言われる隔年の旧七月十七日から十八日にかけて里地区の六つほどのサークラ(祭団)によって行なわれる。次にはグスクマ・メーダのサークラの行ってきたシヌグを略記しよう。里地区にあるグスクマサークラと朝戸にあるメーダサークラは十七日にそれぞれ

のサークラという祭場で根地の神を拜んで出発して途中で合流し、ミシバンタ（北の端で高い断崖となった丘陵地、ハルの向うに北の海が望める）に行き、大岩の傍にシヌグ旗を立てムケーシヌグ（迎えシヌグ）を行なう。

迎えられるパルシヌグの組は島の北の海辺にあるテイドラキウガン（寺崎御願）から出発する。このパルシヌグの座元は前日から寺崎御願のガジュマルの樹下に籠り、その夜の夢見によって世柄や作柄の良し悪しを告げられる。座元と供人は家には帰らずミシバンタに向って出発する。座元は赤い神衣に赤いハチマキ、実の多くなったヤマブドウの蔓をたすきのように身にまとい、供人は白い神衣をつけ、デーク（ダンチク）の束を持つ。ミシバンタのシヌグ旗を目標に畑、原野を進む。

ミシバンタについたパルシヌグの人々を迎えて、グスクマザークラの座元はパルシヌグの座元に、今年の世柄、作柄について訊ねる。パルシヌグの座元は昨夜の夢の告げに従って「フトウシヤ、ユガフウガナシ、ユビドウ。ユカイミ、ウガミヤビュータン。グソーヨウ、ウキバイシタバーリ（今年は、世果報でありますぞ。そのことをよく伺いました。お互いに、気張って励んで下さい）」といったふうに告げ知らすと、迎える座元は感謝をのべる。子供たちはパルシヌグの座元の身にまもっているヤマブドウの実を争ってとって食べる。これを食べると次のシヌグ年まで無病で過せるといふ。また男の子供たちはパルシヌグの供人の持参したデークを分けて持って家々のヤーウチ（家打ち）に出発する。同じサークラの人家を一軒残らず回って、「ウーベー、ハーベー」と唱えながらその柱や壁を

デークで打ち被うのである。

ミシパンタの近くの畑に席を作つて一重一瓶の宴を開き、その後、人々は列を作つて里地区を進んでシチャターという場所でウークイ（御送り）をする。東の海に向つて、ヤーウチに用いたデーク、身にまとつたヤマブドウ、シヌグ旗の竹竿を投げすて「ワーフニトウ、ウラフニトウ、ワーフニヤ、パイヘーク（吾が船と、汝の船と、吾が船は、走れ早く）」と唱える。パルシヌグの座元は赤い神衣を振つて「カリユシドー（嘉例吉に、航海安全に、の意）」と神の船を送るように神送りをする。

⑭国頭村、安田のシヌグとウンジャミ シヌグとウンジャミとが隔年ごとの旧暦七月の初亥の日に行なわれる。シヌグを大シヌグともいい、ウンジャミは小シヌグともいう。シヌグは現在二日にわたる行事である。初亥の日にはアシャギの前のシヌグマーという広場にシヌグ旗が立てられる。午後から集落の男たちは子供も大人もそれぞれ家系によつてきまつている三つの山に分れて登る。山の名は北がササ、西がメーバ、南がヤマナスで、その山中で男たちは半裸の上にワラのガンシナ（鉢巻状の輪）と帯をし、それに山のシイなどの枝やシダの葉をさして頭から体まで被う。頭にはその頃に赤い総状の実をつけるゴンズイの枝をさして飾る。身の丈より高い木の柴枝を持つ。扮装を終ると山に向いて坐り、太鼓を合図に山を拝み、次に海の方を向いて拝む。次に円陣を作り、回りながら柴枝で地面を叩き「スクナーレー、スクナーレー」と唱える。

山の行事が終ると、メーバ山からの太鼓の合図で三つの山から列を作つて山を下る。先頭に太鼓打

ち、それから小さい男の子供を前にして列を作り、「エーヘーホー」と唱えながら山を下る。それぞれの組の主婦たちが飲物を持ってサカンケー（坂迎え）をする。三つの山からの列は合流し、シヌグマーに集まっている集落の人々、主に婦女子たちを左回りにめぐりながらエーヘーホーを唱えて一巡りすると、手にもった柴枝をふり上げて人々の体を叩き祓う。また回っては叩き三度くり返す。次はアシャギの前に並んで坐っている男女の神役たちを三回叩いて巡ぐる。それから行列は集落の中を通って東の海辺に行く。昔はその前に集落の家々を柴枝で叩き祓って回っていたという。海辺にでると、砂浜に山を向いて坐り、太鼓の合図で礼拝し、次に海に向って礼拝する。それから皆海に入ってゆき、頭や身にまとっていた柴や木の枝を海に流し、人々を叩き祓った枝も流し、体を潮水ですすぐ。次に男たちは三々五々と山側の流れ川に行き身をすすぐ。これで昼の行事が終る。

午後四時過ぎになつてシヌグの余興のようにして「田草取り」「ヤーハリコー」「ウスデーク」がシヌグマーの広場で行なわれる。「田草取り」は男女青年十数人が田仕事姿で三味線歌に合わせて田草取りの仕草をする。「ヤーハリコー」は一本の丸太に何本もの縄を結び、男女青年がその縄で丸太を右へ左へと運び、終りに丸太をアシャギの屋根にのし上げる。この間中、水桶で海水をかける真似をすることからも、丸太は船で、船を走らせる模擬行事であるらしい。「ウスデーク（臼太鼓）」は集落の婦人たちが紺地の着物に白鉢巻姿で大きな輪を作り、何人かが手に持つ鼓に合せて優雅に歌い踊る。安田のウンジャミはシヌグと隔年に行なう。シヌググァー（小シヌグ）ともいい、山にも行かず、

海に行くこともない。女神役たちがアシャギで祭りをした後で、青年男女がアシャギの庭で猪を狩る真似事をする。猪になった男を弓矢と矛でしとめる。子供たちを魚にして網に追いこんでとる真似事をする。隣りの安波集落のウンジャミは同じくノロなど女神役中心に行なわれ、ニレーの神をアシャギに迎えて祭る。ニレーの神はマンザモー、ナザレーという岬から来るといふ。船漕ぎ、猪狩り、魚取り、田草取りなどの模擬行事をする。

⑮伊平屋島のシノゴオリメ（七月、島中ニテ日撰仕申。遊一日ノ事）右、アクマハライトテ、男童十人程、アマミ人老人、衣桐袴着テ、白サジ、シレタレ結ビシテ、手々ニ棒ツキ、アマミ人、並、其日ノ、年ナフリノ人、弓矢持、先立仕、

オナヂヤライハウ、エイヤイハウ

ト唱テ、家々ニ入り、又島ノニシ崎マデ行テ、ネヅミヲ取り、年ナフリ持タル、矢ノサキアテ、海ニ入レ捨テ、村ニ帰り、一所ニ寄合、神酒持寄、祝申也。（『琉球国由来記』卷十六）

⑯伊平屋村田名のウンジャミとシヌグ 伊平屋の海神折目、シノゴオリメの『琉球国由来記』の記事は⑪⑫に書いたが、その現状については上江州均氏の報告⁽⁶⁾によって記しておく。

田名のウンジャミは旧暦七月十六日に始まる。ここには海神の役がきまっています、二十名の女神役のうち、オーシド神、ユムイ神、ユートイ神、イシド神の四人が海神となり、オーシド神を中心に行動する。十六日にはムラを二つに分けて各家々を巡る。海神が訪れると家々ではゲットウの葉に包ん

だ餅と酒とを供する。女主人と杯を交し、餅をみやげにする。神女は祓い用のオー（ススキまたはダシチク）を渡すのでこの儀式をオーイリという。男子は家にはいけないと、夜中でも外に出す習わしだった。十七日の朝に神女は白衣をつけ白サージを頭に結び、ノロや海神はサージの上にガジュマルの枝葉で作ったカブイ（冠）を戴く。田名屋の拝殿で祭りをし、四人の海神は屋外で東向きに立ち、大きな木椀にウンサク（神酒）の接待をうける。庭には杭と布とで舟型を作り、四人はその中に入って「メーヌカイ、メーヌカイ（前へ、前へ）」と唱える。航海の様を表わすという。全員村はずれの高台に行き海神を先頭に東に向って別れるしぐさをする。それから元は馬に乗り、今は車で東海岸の拝所を拜んで、岩の上に立ち、神歌をうたい、手に持ったオーを海に投げ神送りを終る。

次に田名のシヌグは旧暦七月十九日に行なわれていた。その行事としては、一〇歳から一四、五歳の二人の少年がトーガメー（咎めの意）になって白衣装に白のたすき鉢巻をして白紙をつけた棒（弓という）を持ち、田名のムラ内からマージャー御嶽へ行く途中、道々「西ナジャリ、南ナジャリ、トーガメー」と唱え、行き合う人や牛馬を叩いた。御嶽では松の木に小縄を結び、それにススキを挿した後、浜へ下りてイナゴを埋め、それから相撲をとった。

十九日には一年以内に生れた男の子を祝うアランジーという行事があり、シヌグモウの広場で男神役の田名サーがその子を抱いて健康祈願をした。二〇日には二年目の男の子、二一日は三年目の男の子の祝いをする。女の子の健康祈願は三月三日に行われた。

——以上に挙げたシヌグ折目、ウンジャミ折目の事例は決して十分なものではないが、これらの事例を中心にして、この二つの折目の共通点と相違点を考えてみよう。

シヌグ・ウンジャミの共通点

一、分布 シヌグとウンジャミの分布は相似しており、相接している。分布図にみられるように国頭地方の西海岸から本部半島の北側には広くウンジャミ（大折目も含めて）が分布し、それに対して本部半島の西側にはシヌグが分布している。それに対してシヌグとウンジャミが隔年に行なわれるのは国頭の北東海岸に数集落が並んでおり、二つを同年に重ねて前後して行なう（或は行なっていた）のは伊江島、伊是名島、伊平屋島、与論島など周辺の離島である。つまり、シヌグ・ウンジャミは本部半島を含む国頭地方とその周辺の離島、それに奄美の与論・沖永良部に限って分布しており、その地域は古生層、中生層からなる山地であって、中頭・島尻の隆起珊瑚礁を中心にした新生代の平坦な地にはほとんど分布していないことが、分布の重要な特徴になっている。

二、期日 シヌグもウンジャミも共に旧暦七月の中旬（盆の後の亥の日など）に行なわれている。これはまた先に述べたように奄美の夏折目（大折目）とも期日を同じくしている。しかし、これも先に見たように『琉球国由来記』には瀬底島と伊是名島とに冬十一月の海神折目があったことが明記されている。この旧暦十一月は夏折目に対して冬折目（芋折目）の月であり、七月と十一月とは夏の折目、冬の折目として対応したものとみることができる。

三、機能 シヌグ・ウンジャミには、殊にシヌグには集落の家々や人々を祓う機能がある。⑬の与論のシヌグでは来訪神となったパルシヌグの座元が持参したデーク（ダンチク）を男の子たちに授けて家々をその笹葉で打ち払って回らせる。⑭の安田シヌグでは木の枝葉をまとして山を下ってきた男たちが、集落の人々を柴枝で打ち払うし、⑮⑯の伊平屋のシヌグではアマミ人（アマミキヨという始祖になった男神人）一人と男の子たちが棒（弓）をもってアクハライ（悪祓い）として人々や馬などをも打ち払っている。ウンジャミではさほど顕著ではないが⑯の伊平屋田名のウンジャミでは海の神となる四人の神女が家々を訪れてオーというススキまたはダンチクを主婦に与えて家を祓わせる。打ち払うばかりでなく、⑮の伊平屋のシヌグではネズミを捕って海に捨てるし、⑯の伊平屋田名のシヌグではイナゴを捕えて浜に埋めるなど悪しきものを除くことも行なわれる。このようにシヌグ・ウンジャミの主な機能は人々、家、集落の悪しきものを払い除くことである点で共通していると言える。

シヌグ・ウンジャミの相異点

シヌグ折目には男子が中心になって活動する。シヌグに神として訪れてくるのはみな男神である。⑬の与論シヌグではパルシヌグの座元が赤い神衣をつけ、その上にヤマブドウの蔓をまとして出現し作柄を告げる。⑭の安田シヌグでは集落の壮年・青年・少年の男たち全員は家系によって三つに分れて山に登り、シイの枝やシダの葉を身にまとして神になって集落に下ってくる。国頭村の辺土、奥、楚州などでもみなこれによく似た形である。⑮の『琉球国由来記』の記事は注目されねばならない。

伊平屋のシヌグでは一人の壮年が白衣、白鉢巻をして弓矢をもち、棒をもった男童十人ほどを率いて集落を祓って巡る。由来記はこの人物をアマミ人と表現している。これは伝説の始祖神アマミキヨであることは明らかである。シヌグは始祖神アマミキヨが出現してシマを祓う行事であることがわかる。安田では柴をまとして山を下る男たちを「アマン世の姿」だと言うが、それは始祖たちの姿の意であろう。⑩の伊平屋の田名シヌグでは二人の少年が白衣装、白タスキ姿で棒をもって道ゆく人や馬を叩く。この少年をトーガメーというのは咎めの意で、けがれを祓うばかりでなく、その罪悪を打ち咎める意があることを教えていよう。

これらの例にみられるようにシヌグでは来訪する神となるのはみな男性である。安田などのような男たち全員が神の群として山を下るのと、与論や伊平屋でみるように一人の男神だけが訪れ、男の子たちをその眷属として伴なうのとどちらがより古い形態かは簡単に結論は出ないが、男たち全体が神になる資格をもつことはよく示されていよう。いわばシヌグは男性年齢階梯集団による来訪神事である。その神は山から祖神として下ってきて、人々、家々を柴などで叩いてまわるきびしく、また恐れられる神であると言える。

それに対してウンジャミの方はイナグ（女）の折目と言われるように、女が祭りの中心になる。⑪の伊平屋島田名のウンジャミの調査は詳しいものだが、この折目で海の神になり、ガジュマルの冠をつけて行動するのはノロではなくてオーシド神、ユムイ神、ユートイ神、イシド神の四人の神女であ

る。家々を訪れて祓いに使うススキ、ダンチクを家の主婦に授ける。主婦は神女の侍女として家を祓う。このとき男たちは誰も家の中に居てはならない。四人の神女にそれぞれ名がついているのは職能に分業があるのであろう。ノロを中心とする祭祀組織には、このような来訪神になる役割の者がいたことは奄美では多くみられる。例えば名瀬市大熊には二月に訪れ四月に帰っていく海神テルコ神になる神女が五人ほどいてその名もテルコ神といい、元は船に乗って艚声をあげながら大熊の夜の浜に着く行事もあったという。伊平屋でも大熊でもこの神女たちにはノロ祭祀組織の中できまつた神になる役割が定められている。大熊の場合、この神女たちはテルコ神送迎の祭以外の祭りには参加もしない。

シヌグの男神たちが山から下ってくるのに対して、ウンジャミの女神たちは海から訪れて来る海神である。⑭に記した安波のウンジャミでは、迎えるのはニレー（ニライ）の神で、この神はマンザモー、ナザレーの岬から上陸して来るという。またウンジャミの中ではしばしば神女たちが模型の舟に乗って航海する様子が演出される。伊平屋島田名では四人の海神たちは杭と布とで作った舟の中でメーヌカイ、メーヌカイと舟を進める掛け声をかける。今帰仁城内には舟型の石の堤（長さ二メートル高さ六〇センチ）が二つあって、一つは今帰仁舟^{ウニ}、一つは本部舟と言われる。今帰仁村今泊のウンジャミ（ウンジャミ）では今もここで船こぎの行事がある。⁽⁷⁾

このようにウンジャミはノロ神女組織によってとり行なわれ、その女神役の中に海神（ニライ神）になる役があり、舟によって海からの去来の様を模倣的に行ない、祓いの行事もシヌグの神のような

荒々しいものでないことが特徴となっている。

四、シヌグからウンジャミへの変遷

シヌグとウンジャミとは、

- 1、山地である国頭から奄美の地域、北部琉球圏に限って分布する。
- 2、期日は旧暦七月中旬に行なわれる（旧十一月のウンジャミもある）。
- 3、集落、家、人を打ち祓い、災厄をのぞく機能をもつ。
などの共通点をもつが、また、

シヌグは男子年齢階梯集団による祭り、男たちが山から下る神（祖神アマミキヨ）となって、人々をきびしく打ち祓う。

ウンジャミはノロ制度下の女性神役組織による祭り、女神役が海から来訪するニライ神となり舟航の様も演じ、家々人々の祓いなどを行う。

という相異点がみられる。

このような共通点と相異点をもつシヌグとウンジャミの二つの祭りが、分布図にみられるように、集落によって、一方だけが年々行なわれたり、また隔年に交互に行なわれたり、二つを引き続いて行なうなど、いろいろの変化のある行なわれ方をしている。一体どうしてこのような現象がおこったの

だろうか。

簡単な表現をすれば古形をもつシヌグが消失して新しいウンジャミがそれに変ろうとしているためと考えられる。そう考える理由を説明しよう。

1、シヌグとウンジャミの分布図をみれば、シヌグの分布は奄美の沖永良部・与論、国頭の伊平屋島・伊是名島・伊江島、中頭の伊計島・平安座島など周辺の島々が中心で、その他は国頭の北東岸にみられて、いわば外圏に分布しているのに対して、ウンジャミだけの分布する地域は本部半島北部と国頭の西岸のいわば内心部になっている（本部半島南部のシヌグは内容はほとんどウンジャミになっている）。この分布は古いシヌグがウンジャミに押しやられて周辺に残留している形とみることができる。民俗学ではこれを周圈的分布といって、周辺にある民俗が古く、中心の民俗が新しいことを示すと考えられている。

2、『琉球国由来記』（正徳三年一七一三年編集）の伊平屋の記事には旧暦七月にシノゴ折目のこと⑮、旧暦十一月に海神折目のこと⑯が記されている。ところが近年になると⑯の田名の例にみるように七月にまずウンジャミが行なわれ、三日後にシヌグが行なわれるようになり、現在はさらにシヌグが消失してウンジャミだけとなっている。二百数十年の間にウンジャミは十一月の祭りから七月の祭りの正祭の位置に移り、シヌグはその間に祭りの正位置をウンジャミに譲って退ぞき、さらにここ数年の内に消失したのである。

また、今帰仁村今泊では現在ウンジャミだけ行なっているが、大正初めまではウンジャミの三日目に、シヌグ山から男一〇人ほどがシヌグ道を下りて男の子を集めてスクを綱でとる真似をした。⁽⁸⁾ここでもシニグの消失がはっきりしている。

このような事例でもみられるように、シヌグ・ウンジャミの消長は明らかだが、その原因をなしたのは何かを考えねばならない。

まず、シヌグの背景をなしている地域性から考えよう。シヌグの基盤をなしているのは国頭の山原と言われる山地の生活である。山地の山樵や焼畑をいとなんできた男性年齢階梯制の強い社会である。だからシヌグは男子中心であり、とくに男の子供組の活動が盛んで祭りの主役となる傾向があり、その神は男性が山の柴やシダで扮装して出現し、木の柴枝や棒などを持って荒々しく村人を打ち払ったりする。このようなシヌグの基盤となった山地は沖縄本島では国頭とその周辺の離島にあるだけで、中南部沖縄にはみられない。これがシヌグが国頭とその離島だけにしかない理由である。

シヌグの母胎となった沖縄国頭から奄美大島にかけての照葉樹中心の山地文化は九州の山地文化と直結している。九州脊梁山地から大隅山地へとつながる地方の山の神講、山の口開け、柴祭りなどはみな男性年齢階梯制の下で行なわれ、男の子のよく活動する荒々しい行事となっている。多分、この九州山地から山樵や焼畑を行なう人々が、南の島々の山地を求めて南下し、奄美大島など、沖縄本島国頭など（さらに八重山の島々へ）にこの山の文化をもたらし、この地で山の文化はよく育ってシ

ヌグ折目が行なわれることになったと思われる。

奄美の島々から沖繩本島国頭までの北部琉球圏のこの特徴の鮮明な山地文化に育てられたのはシヌグばかりではなく、例えば先に事例⑥⑦に記した奄美大島の冬折目（モーバライともいう）は冬の山芋などイモ類の収穫祭でありながら、この日には山の恐ろしい神が里に下ってくる日だとされ、集落で一頭の牛を殺して人々の身を固め、シマを固めるためにその肉を食べて、山の神の災を防ぐ行事があった。沖繩本島国頭でも⑨⑩のように旧暦十一月の芋祭りの日に同様に牛を供犠して山の神の災を祓う。これらはみなこの地の山地の生活と文化に根ざした祭りと言えよう。

シヌグの次にウンジャミについて考えてみよう。ウンジャミの神は海から来訪する。その海の彼方の国はニライ・カナイと呼ばれて沖繩本島中・南部で伝承する海彼の国である。先にも書いたように奄美の島々から伊平屋島、沖繩本島の国頭にかけての海の国の名はテルコといって、ニライとは名称も位置も性格も別である。このニライから来訪する神になるのはノ口神女組織の神女役である。

このようなウンジャミの背景をなすのは沖繩本島の中南部に発展した海洋性平地文化である。この地は隆起珊瑚礁からなる平地で、山はなく川は育たず乾燥し易い畑地ばかりで麦を主作物とする畑作地であった。その代りに海洋への発展は盛んに行なわれた。浦添・首里を中心にした琉球王国はこの乏しい畑作農耕と盛んな海外貿易の上に成立した。この琉球王国の文化が海洋性平地文化なのである。この文化には海上生活の男たちを支えるオナリ神信仰があり、この女性を守護神とする信仰を基盤に

して、聞得大君、ノロを中心とする女神役組織が組み立てられた。また海上の理想郷としてのニライ・カナイの思想もこの海洋性平地文化の上に成立したのである。

ウンジャミはすなわちこの沖縄本島中南部の海洋性平地文化を母胎とした祭りである。ここで重大な疑問にぶつかる。ウンジャミが海洋性平地文化の祭りであるなら、それは沖縄本島中南部の平地の集落にこそあるべきであるのに、逆に山地の国頭や奄美にだけウンジャミが見られるのは何故なのであるか。

そのことを私は次のように理解している。先に記したように国頭の地には照葉樹山地文化が根づいてシヌグの祭りが行なわれてきた。シヌグは国頭から奄美にかけての土着の祭りであり、国頭の地を支配していた北山按司（北山王）の下での祭りであった。歴史上では北山王は中山王に滅ぼされ、三山統一の後に琉球王国が興り、国王尚真の時代を迎えて、海洋性平地文化は大きく進展して、聞得大君を頂天とするノロ神女制度が確立され、国頭の地にもそれぞれの集落にノロ制度の祭祀組織が整えられた。しかし、ウンジャミはその神女制度が首里から国頭へ持ち伝えた祭りではなかった。

国頭（北山）の地に土着した照葉樹山地文化と、首里からノロ神女制度がもたらした海洋性平地文化との対立抗争がおこった結果としてウンジャミは国頭の地で作られたのである。ノロ神女たちは彼女たちにとっては異質である祭り、山から男たちが神となって下ってきて人々を打ち祓う祭りのシヌグに拮抗するために海洋性平地文化に根ざした祭り、神女が海から訪れる神となって村人を祓う祭り

のウンジャミをこの国頭の地で創出して、それをシヌグと期日を同じにして並立する形で行なうことを始めた。信仰や生活の指導者としての人口たち神女の力は大きく、古い伝統のシヌグはだんだんと衰微しウンジャミは隆盛となった様は、先にみたように『琉球国由来記』の時代から現在への移り変りの中にも明らかに読みとれるものである。

シヌグとウンジャミの目的を同じくしながらも対立した関係はこのように考えてみればほぼ正しく把握したことになる⁽⁹⁾と思う。

終りに、もう一度この文で述べてきたことを一覧しておくことにする。

夏祭り（旧暦七月に北部琉球圏だけにみられる祭り）

夏折目・大折目・粟折目（奄美大島）——粟の収穫祭、桃や桑の枝で夏の祓い①②

海神折目・大折目（国頭、奄美南部）——集落・家・人の祓い、悪払い③④⑤⑬⑭⑮⑯

シヌグ折目（国頭、奄美南部）——集落・家・人の祓い、悪払い⑤⑬⑭⑮⑯

冬祭り（旧暦十一月に北部琉球圏だけにみられる祭り）

冬折目（奄美大島）——芋類の収穫祭、山神を恐れまつる、牛の供犠①②⑥⑦

芋折目（国頭地方）——芋類の収穫祭、山神をおそれ牛の供犠をする⑧⑨⑩

海神折目（国頭離島）——不明だが、集落、家、人の祓いか⑪⑫

注

- (1) 平敷令治『沖繩の祭祀と信仰』（第一書房）
- (2) (1)に同じ
- (3) 「久志村汀間部落調査」（『沖繩民俗』第一三三号）
- (4) 「上本部村具志堅部落調査」（『沖繩民俗』第一五号）
- (5) 国頭郡教育会『沖繩県国頭郡志』（琉球郷土史研究会、一九一九年）
- (6) 上江州均「伊平屋諸島の農耕儀礼と漁撈習俗」（『琉球弧の世界』海と列島文化6）小学館
- (7) (1)に同じ
- (8) 右に同じ
- (9) 琉球北部圏の照葉樹山地文化と中南部圏の海洋性平地文化については拙稿「生態史としての南島文化」（『沖繩文化研究』一四）を参照頂きたい。シヌグとウンジャミの拮抗と全く同様な事例が奄美大島竜郷町秋名の八月新節のショチュガマとヒラセマンカイの拮抗がみられる。